

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月18日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21531001

研究課題名（和文） 戦争被害と健全さの回復：戦争体験者のライフストーリーを用いた教材開発に関する研究

研究課題名（英文） Study material development for lessons about pursuing health in spite of wartime trauma: Stories from Pearl Harbor and Hiroshima

研究代表者

高橋 龍太郎（TAKAHASHI RYUTARO）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）

・東京都健康長寿医療センター研究所・副所長

研究者番号：20150881

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、広島とパール・ハーバーにおいて戦争被害を受けた日米 51 名の高齢者へのインタビューデータ分析を通じて、彼らの人生における健康の転換点を見出すことである。広島被爆者からは「被爆者になること」というテーマが、パール・ハーバー生存者からは「時に現れる誇りに思う記憶」というテーマが浮かび上がった。広島被爆者においては生涯持続し更新される健康体験の核を形成し、パール・ハーバー生存者においては折に触れて現れる体験であった。体験や国を超えて、他者とのつながり、平和の希求が一貫して表出された。

研究成果の概要（英文）：This study examines 51 stories of health, shared by people who survived the wartime trauma of Hiroshima and Pearl Harbor, seeking to identify turning points that moved participants along over their lifetime. The central turning point for Hiroshima survivors was “becoming Hibabusha (A-bomb survivor) and for Pearl Harbor survivors was “honoring the memory and setting it aside.” Wartime trauma was permanently integrated into survivors’ histories, surfacing steadily over decades for Hiroshima survivors and intermittently over decades for Pearl Harbor survivors. Regardless of experience or nationality, participants moved through wartime trauma by connecting with others, pursuing personal and global peace.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学

キーワード：教材開発、平和教育

1. 研究開始当初の背景

現在 80 歳代を迎えつつある人々はきわめてユニークな世代である。生活に必須の食の問題をとっても、青少年期に飢えと食糧難を生き延び、その後の高度成長期には飽食の時代を経験し、そして現在は、食の質を根本的

に脅かす世界的な食品流通や温暖化の課題が問われている。このような彼らの人生を振り返った時、もっとも大きな位置を占めているのが半世紀以上前の戦争体験であると思われる。

私たちは、脳卒中の高齢者を対象として、

健康と病体験のインタビューを行い、彼らにとっての健康の意味を分析するという日米共同研究を行った。(R Takahashi, et al., 2005) このインタビューの中で、戦争体験の話がしばしば出てきた。第二次世界大戦という戦争期を生き抜いた高齢者にとって、戦争体験は生涯を通じて生活の根底に影響を与え続け、健康と生活の危機が出現したときに浮上する「傷跡」であり支えでもあることを示唆しているだろう。

そこで、日米の戦争体験者を対象として、過去の「健康体験」、その後現在に至るまでの健康被害とその影響を聴き取り、体験の個人差と文化差、およびその後の歩みの中で健全さを回復しようとする強さに着目した共同研究を行い、その成果をもとに学童、中学生、一般の人々に向けた教材作成、普及活動を実施して、日米に限らず世界中で現在もなお減少することのない暴力、敵意、侵害などの Aggression 行動への取り組みに貢献していきたいと考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、①日米太平洋戦争の戦争被害体験の“象徴”的存在として生きてきたパール・ハーバー生存者と広島市の被爆者を対象とする日米共同研究であること、②戦争とその後現在に至る人生の歩みを聴き取り、その語りから健全さを回復しようとする強さ(レジリエンス)に着目して分析を行うこと、③抽出されたテーマを再構成して、学童向けの3D立体絵本や、中学生向け副読本の作成をめざすとともに、一般の人々向けに、Drama Performance (www.fau.edu/storytelling)を実践している研究者の協力を得て脚本化した朗読劇を上演し、この上演記録をDVD(映像教材)に記録して普及を図ることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は平成19年度・20年度の「萌芽研究」を展開するもので、米国パール・ハーバー生存者協会(PHSA)の協力の下に当時16歳以上だったパール・ハーバー攻撃体験生存者男女合計26名に実施したインタビューと、広島県被団協と被爆者団体協議会東京都支部(東友会)の協力を得て、原爆投下当時13歳以上の広島と東京に在住の被爆者28名に実施したインタビューについての分析を、電子メールの交換とインターネット会議を通して進め、そこから「健康体験の転換点」の抽出とそれらが具体的に表出された引用句の整理、そして、各研究者から出された日米の戦争体験者にみられるそれぞれ独自の視点、日米共通にみられる視点の評定を比較検討し共有化をはかる。

続いて、朗読劇上演に向けて脚本化を進め、

日米での上演方法などについて計画を立てる。その成果を国際ヒューマンケアリング学会などにおいてワークショップ形式などで発表するとともに、看護、ケア研究者との交流を持ち、教材作成の方法、交渉ルートなどについても具体化させていく予定である。

4. 研究成果

平成21年度は、年末までにすべてのインタビューデータについて基本分析を終了し、最初の5例ずつについての分析結果を米国老年学会(GSA)の公式ジャーナルである *Journal of Aging, Humanities, and the Arts* に原著論文として投稿し、掲載された。平成22年2月には、ダライ・ラマ法王の米国フロリダ訪問に合わせて計画された Florida Atlantic 大学のピースウィーク行事の一つとして、共同研究者の Patricia Liehr Florida Atlantic 大学看護学部教授とワークショップを開催した。平成22年度は、9月開催された米国看護学会(2010 State of the Science Congress on Nursing Research)のシンポジウムにおいて研究成果を日米の研究者4名が発表した。藤崎駐米大使夫人も参加し、活発な質疑・交流を行った。また、朗読劇としての上演に向けて脚本化を進めるため、Ketty Morris Florida Atlantic 大学芸術学部博士課程学生を呼び、スケジュール確認、上演方法などについて討論を行った。平成23年度は広島赤十字看護大学で行われた国際ヒューマンケアリング学会においてワークショップを持ち、3名の研究協力被爆者の体験談を含め看護、ケア研究者との交流を持った。また、3D立体絵本の製作経験を豊富に持つ Andrew Binder 教育学部准教授と今後の教材作成に関する打ち合わせ、脚本化の可能性の検討、パフォーマンス開催の場所の選定などの議論を行った。

これらの研究成果は、Advances in Nursing Sciences 誌に“A lifelong journey of moving beyond wartime trauma for survivors from Hiroshima and Pearl Harbor”と題して掲載された。二つの戦争体験高齢者のインタビューから抽出された主な転換点は次のとおりである。広島被爆者からは、1.原爆の投下によって、先が見えない状態のまま終戦を迎えたこと、2.「被爆者」になること、3.かけがえのない平和へと通じる、人生の意味/目的を見出すこと、という3つの大きな転換点が見出され、パール・ハーバー攻撃生存者からは、1.日本軍の爆撃を受けているという事実を理解し、それに何とか対処しようとする、2.戦争体験の記憶を誇りに思いつつもそれに拘泥せず、日常的ではあるが価値のある活動に従事すること、3.安らぎをもたらす自分を理解してくれる場としての他者との絆を大切にすること、とい

う 3 つの大きな転換点が見出された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① Takahashi R, Nishimura C, Ito M, Wands L-M, Kanata T, Liehr P、Journal of Aging, Humanities, and the Arts、査読有、3、2009、pp.160-174、[DOI:10.1080/19325610903089872](https://doi.org/10.1080/19325610903089872)
- ② Liehr P, Nishimura C, Ito M, Wands LM, Takahashi R, Advances in Nursing Science、査読有、34、2011、pp.215-228、[DOI:10.1097/ANS.0b013e3182272370](https://doi.org/10.1097/ANS.0b013e3182272370)

[学会発表] (計 8 件)

- ① 伊東美緒、被爆高齢者の健康体験：“あいまいさ”の消失から確信への軌跡、第 51 回日本老年社会学会大会、2009 年 6 月 19 日、横浜
- ② Liehr P、Above All, Valuing Peace: Stories from Hiroshima and Pearl Harbor、The Dalai Lama, Peace Week events、2010 年 2 月 23 日、フロリダ州ボカ・ラトン
- ③ Takahashi R、Political, social and cultural common ground – Exploring common ground in health stories from Pearl Harbor and Hiroshima survivors、2010 State of the Science Congress on Nursing Research、2010 年 9 月 27-29 日、Washington DC
- ④ Ito M、Becoming Hibakusha – Exploring common ground in health stories from Pearl Harbor and Hiroshima survivors、2010 State of the Science Congress on Nursing Research、2010 年 9 月 27-29 日、Washington DC
- ⑤ 中尾秀子、被爆者の被爆後から現在までの「健康体験」-第 1 報-被爆当事者としての体験に焦点をあてて、第 16 回日本老年看護学会、2011.6.15-17、東京
- ⑥ 伊東美緒、被爆者の被爆後から現在までの「健康体験」-第 2 報-社会的側面に焦点を当てて、第 16 回日本老年看護学会、2011.6.15-17、東京
- ⑦ 高橋龍太郎、広島被爆者とパールハーバー生存者の健康体験：敵と味方が消えるとき、老年心理学研究会、2012.2.8、大阪
- ⑧ Liehr P, Wands L-M, Ito M, Takahashi R、Building bridges to cultivate peace by coming to know the health stories of Hiroshima and Pearl Harbor survivors、International Hiroshima Conference

on Caring and Peace、2012.3.24-25、Hiroshima

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 龍太郎 (TAKAHASHI RYUTARO)
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター (東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・副所長
研究者番号：20150881

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

伊東 美緒 (Ito Mio)
地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター (東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：20450562